

博士論文の要旨及び審査結果の要旨

氏名 李 英花
 学位 博士 (農学)
 学位記番号 新大院博 (農) 第 145 号
 学位授与の日付 平成 26 年 9 月 22 日
 学位授与の要件 学位規則第 4 条第 1 項該当
 博士論文名 中国出稼ぎ農村における農地流動化と規模階層変動に関する研究

論文審査委員 主査 教授・青柳 斉
 副査 教授・木南 莉莉
 副査 教授・岡崎 桂一
 副査 准教授・平泉 光一
 副査 助教・伊藤 亮司

博士論文の要旨

本論文は、中国出稼ぎ農村地帯における近年の農業構造変動の形態とその諸要因に関して、公表統計上の制約から主に事例研究に依拠して解明している。第 1 章では、研究対象として、出稼ぎ農村地帯と事例農村の農業構造について類型論的な観点から特徴づけた。

第 2 章では、中国全体の農地流動化の動向や規模階層構造の地域性、その背景等に関して、既存の公表統計に依拠して検討した結果、まず、農地の流動化は農業機械化や農外雇用市場が拡大した 90 年代半ば以降に進展していることが確認できた。また、06 年の農業センサスに依拠して省別データで見た借地面積率と非農家率の間には緩い相関があった。

第 3 章では、黒竜江省の H 村の事例分析から、朝鮮族農村の農地流動化の背景と規模階層変動の展望について次のような結論が得られた。まず、農地貸し手側の背景として、農外雇用機会が少ない地域条件のもとで、朝鮮族農民に対する韓国への合法的渡航条件の緩和や国内遠方大都市での雇用機会の拡大で長期出稼ぎを急増させた。また、出稼ぎの高収入は村外転出による子弟の高学歴化を促進し、挙家離村の世帯を増大させた。他方、隣接の T 村では農家の経営面積が小さく、稲作規模拡大のための借地志向農家が潜在的に多い。このような貸し手・借り手双方の事情が農地流動化を促進し、朝鮮族農民による大量の離農の一方で、借地による中層・上層農が形成されたのである。

第 4 章では、中国内陸出稼ぎ農村の典型である四川省眉山市 S 村の事例調査結果から、本村では池上・菅沼のいう「農家世帯員のライフサイクルに規定された階層変動」は当てはまらないことが分かった。そして、農外労働市場の展開によって、貸し手農家の増大と農地流動化が進展し、均分相続制の下でも借地による規模拡大が進展していること、但し一方で、借り手農家の借地は積極的な規模拡大志向に基づくものではなく、出稼ぎ農家等の貸し手が「要請」して農業専従農家に「借りてもらっている」状況にあることを明らかにした。また、農地の借り手＝農業担い手層の希少化にともない、荒廃農地が発生・増加している問題状況を指摘した。

第 5 章では、成都市の行政区にある Z 村を事例に取り上げ、出稼ぎ先進農村でありながら帰村・帰農者が多い背景について検討した。その背景の 1 つは、出稼ぎ者が低学歴で主

に製造業等の労働条件が良くない就業先に限定され、出稼ぎ先が遠距離の広東に集中していたことにある。近年になって、成都市及び近郊に雇用機会が増えるとともに省外出稼ぎは減少することになった。2 つは、同村が省都の成都市（市域）に近いこともあり、90 年代に入り、都市部の野菜需要の増大から野菜販売による農業収入の機会が増えたことである。3 つは、平地農村で圃場条件や町部との交通条件に恵まれ、省内僻地の中山間地農村に比べて農業労働の負担が小さいことである。

また、農地流動化が進展しない理由は、小経営面積でも多品目の周年的な野菜販売で高収入が得られること、他方、成都市との交通条件が良く、農繁期に一時帰郷する出稼ぎ兼業農業が容易であり、そのため離農者が少ないことであった。但し、20 代で高学歴化が進展して成都市内への出稼ぎ者が増えていることから、将来的には離農が増大し、農地の流動化が進展する可能性もあることを指摘した。

以上の主に調査事例村の比較研究から、結論として、中国出稼ぎ農村において、農地流動化による経営規模の拡大は、基本的には借り手側の農業立地条件や都市市場とのアクセス条件、さらには商品化作物の収益性によって左右されていることが分かった。そして、農業立地条件が不利な出稼ぎ農村においては、農地流動化の促進や農地荒廃の防止にとって、既存の農業経営補助政策に加えて、農村・農業インフラ整備が最も重要な政策課題になっていることを提起した。

審査結果の要旨

本論文は、研究成果として既存の学会誌投稿論文 3 編を基にして作成されている。これまで、中国農業の規模階層変動（農民層分解）に関する先行研究は少なく、本論文は特に出稼ぎ農村に焦点を当て、そこでの農業構造変動の多様性とともにもその変動過程と諸要因に関して主に事例調査によって明らかにした。事例調査方法の不備や少数事例村での判断の制約など、今後に残された検討課題は少なくはないが、この研究分野において独自性のある研究成果と評価しうる。よって、本論文は博士（農学）の博士論文として十分であると認定した。